

凝固検体の保存条件によるデータへの影響

(株) 兵庫県臨床検査研究所

○森川貴道 平松聖史 福永知恵 柴原千春 島田一彦

【はじめに】

凝固検査は病態の把握、先天性疾患の発見、治療効果のモニターなど、出血・血栓傾向を示す病態には様々な原因があり、それらの原因に応じて適切な治療を行う為、血液凝固検査は非常に重要な検査である。その為、凝固検査は迅速で正確なデータ報告が求められる。

【目的】

凝固検査は、採血から検査までの時間が重要となる。本来であれば血漿を分離し凍結保存するが、クリニックでは遠心機も持っておらず凍結保存する事が難しい状態である。今回、検査までの凝固検査のデータが冷蔵保存と常温保存でどのようなデータ変化があるかPT検査について検証を行ったので報告する。

【内容・方法】

検体の搬送時間で冷蔵検体と常温検体でどのように検査データに差があるか検証した。方法として、検体搬入後に依頼項目の測定を行い、その後検体を攪拌し、2分割して冷蔵と常温にて検体を全血保存。検査毎に遠心を行い、測定後すぐに攪拌するという形式にて測定を行った。

【結果】

検証を行った結果（測定値、0時間値と24時間値の変動率）を表にまとめた。

常温	0h	3h	6h	12h	24h	変動率
No 1	12.3	12.3	12.1	12.5	13.6	110.6
No 2	14.4	14.3	14.3	15.2	17.7	122.9
No 3	15.9	15.4	15.4	15.7	18.4	115.7
No 4	11.9	12.0	11.9	12.2	13.3	111.8

冷蔵	0h	3h	6h	12h	24h	変動率
No 1	12.3	12.3	12.3	12.0	13.2	107.5
No 2	14.4	14.0	14.2	14.6	16.0	111.1
No 3	15.9	15.4	15.1	15.7	16.2	101.9
No 4	11.9	12.2	12.0	12.0	12.9	108.4

【考察】

今回の検討より、12時間後から差が大きくなり、特に24時間後の結果では常温保存と冷蔵保存の明らかな差が見られた。今回の検討で、データの変動は大多数が同様の変動を示したが、一律ではないことが分かった。

【まとめ】

今回の検討結果から、PT検査においては12時間値以降からは常温保存の検体で大きな変動が認められた。また、冷蔵検体においても24時間値はほぼ全ての検体で変動がみられた。このことから、採血後に測定までに時間を要する場合は冷蔵にて保管し、できる限り12時間以内に検査する必要があると考える。現在、他項目についても検討を行っている。この結果を踏まえて考えていきたい。

《連絡先 TEL 079-267-1251》

※枠線は、抄録集には印刷されません。